

Title	清末から中華民国にかけての中日美術教育関係史の研究 : 師範教育を中心とする
Author(s)	陳, 琛
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42203">https://hdl.handle.net/11094/42203</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	陳 琛
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 5 9 1 0 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 1 3 年 3 月 2 3 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学 位 論 文 名	清末から中華民国にかけての中日美術教育関係史の研究 －師範教育を中心とする－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 神 林 恒 道  (副査) 教 授 上 倉 庸 敬 助 教 授 藤 田 治 彦

#### 論 文 内 容 の 要 旨

1頁が、40字×30行、注をふくめて141頁すなわち400字詰原稿用紙に換算して約420枚の本文と、図版・付録（一）略年表・付録（二）人名解説の別冊67頁から成る本論文は、美学研究の視点から「中国の美術教育において日本の芸術思想がどのような関係にあったか」を明らかにしようとしたものである。対象は清国末期から中華民国初期すなわち1902年～1920年代の師範学校に限定されている。この時期の中国美術教育界には、学制の公布にともない美術教員が早急に必要とされ、中国師範学校卒業生の日本留学、日本人教習の中国招聘、日本書の翻訳による中国教科書の作成という特徴的な現象があらわれている。師範学校における美術教育を中心にすえて考察すれば、上述のテーマは端的に明らかになるだろうというもくろみである（「はじめに」）。

中国における西洋画学事始は1852年フランス人宣教師による上海徐家彙土山湾図画館である。しかし、自強求富のために日本に倣った西学の導入を洋務派が主張した結果、主として軍事・科学技術の学校において絵画製図が教えられることになった。中国の美術教育は始まりにおいて一途に軍事を目指し、それは模範とした日本以上に甚だしかった。その実態を1867年設立の福建船政学堂給事院のカリキュラムから明らかにする（「第1章 中国近代学校設立前の近代的学堂における西洋画学の受容過程（1902年以前）」）。

中国最初の学制ではあるが十全な展開には至らなかった1902年の壬寅学制、その改正版であり現実の成果をあげた1904年の癸卯学制は、いずれも日本の学制に倣ったものである。癸卯学制を基礎づけた奏定学堂章程を分析して日本の影響がどのようなものであったかを明らかにし、それが中国の師範学校においてどのように実現されていったかを探る。日本学制のなかでもその実学の側面を取捨選択し、日本書から翻訳された教科書も専ら殖産興業を目的として編集されていた（「第2章 中国近代学制への日本学制の影響」および「第3章 師範学堂における図画手工科の設立（1906年）」）。

中国における西洋学の移入は日本を媒介としており、当初から日本への留学生は大きな割合を占めていたが、清朝政府は思想上・政治上・経済上の理由から1902年以降、日本文部省および帝国教育会に対して公式に日本人教習の派遣を要請した。その経緯、実態、結果を具体的に考量する。日本人教習は言葉の障害によって目覚ましい成果はあげられなかったものの、日本にとっては大陸侵略の先兵となり、また中国にとっては教習個人として親日の感情と美術への理解を育てた（「第4章 お雇い日本人教習」および「第5章 事例研究－南京两江師範学堂図画手工選科と中日美術教育関係」）。

軍事に役立つことだけを目的にした近代中国の美術教育は、日本との関係を深めるうちに西洋美術に対する理解を養い、中国に独自の美術および芸術思想を生むことになった。その代表的かつ典型的な例をふたりの芸術家において確認、実証する。ひとり清末の師範学校で教えた李叔同（1880～1942）であり、ひとり民初の師範学校に学んだ豊子凱（1898～1975）である。ふたりはいずれも、民族の危機のなかで教育制度の実学的かつ大衆教化的な側面を積極的に担うと同時に、日本をとおして西洋美術の理解に努め、日本に親しみながらも批判的に日本の西洋理解を受容して、中国の伝統を生かした独特な芸術思想を育てあげ、そして个性的に生きた。それは近代中国における芸術家の、ひとつの生き方であった（「第6章 渡日留学生李叔同の美術・美術教育思想とその活動をめぐって」および「第7章 中華民国初期の渡日留学生、豊子凱の美術教育思想をめぐって」）。

### 論文審査の結果の要旨

近代中国の美術教育における日本との関係は教育史においても芸術史においても興味ぶかいテーマであるが、現在まで総括的な研究はほとんどなされていない。日中両国の言葉と制度また歴史のみならず、西欧をもふくめた教育思想と美学に通暁していることが求められるからであろう。先例のない困難な仕事に立ち向かい、大局的に両国制度の類似点と相違点を分析して日中の交流を明らかにし、しかも事象研究としてひとつの師範学校ひとつの師範ひとつの学生をつぶさに検討し、両国の関係を具体的に浮かび上がらせたことが、本論文における最大の功績である。

とりわけ、日中両国の卒業生名簿などの文献を博搜したうえで、1887年から1911年の民国樹立までのあいだに日本へ留学した主要な中国人学生の動静を一覧した付表は、特筆せざるをえない。表をながめるだけで多くのことが解き明かされる労作である。

上述の成果だけでも十分、学位授与にふさわしいと思われるが、本論文は副産物のようにさまざまな新知見も生みだしている。美術における西洋受容の展開が、明治日本と清末民初の中国ではどのように同じであり、どのように違っていたか。その理由と原因はどこにあったか。東洋における近代化の再考。こうした錯綜した問題のヒントを、本論文はみずからのテーマを真っ直ぐに追求するなかで、本文においてまた注において、適切に書き留めている。今後のさらなる研究を期待したい。

教育思想に対する洞察および美学と芸術思想に関する解釈にはいまだ生硬なところも見受けられるが、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に十分ふさわしいものであると認定する。